

大豆・当面の放射性セシウム対策について

福島県農林水産部

平成23年産大豆については放射性セシウムの暫定規制値（500 Bq/kg）を超える検体はありませんでしたが、今年4月1日より食品に含まれる放射性セシウムの新基準値が100 Bq/kgとされたことから、大豆についても放射性セシウム吸収抑制対策の強化が必要となりました。深耕や反転耕などと併せ、以下を重点とした対策を取るようになしてください。

1 カリの施用

（1）大豆栽培におけるカリの施用試験結果（抜粋）

県農業総合センターによる平成23年産大豆栽培における土壌と大豆子実の放射性セシウム濃度の試験結果から、基肥のカリ成分量を慣行の2倍量にあたる16 kg/10 aとし、さらに追肥で4 kg/10 aを施用することで、無カリ区に比較し放射性セシウムの吸収を半分程度まで軽減できることが分かりました（図-1）。

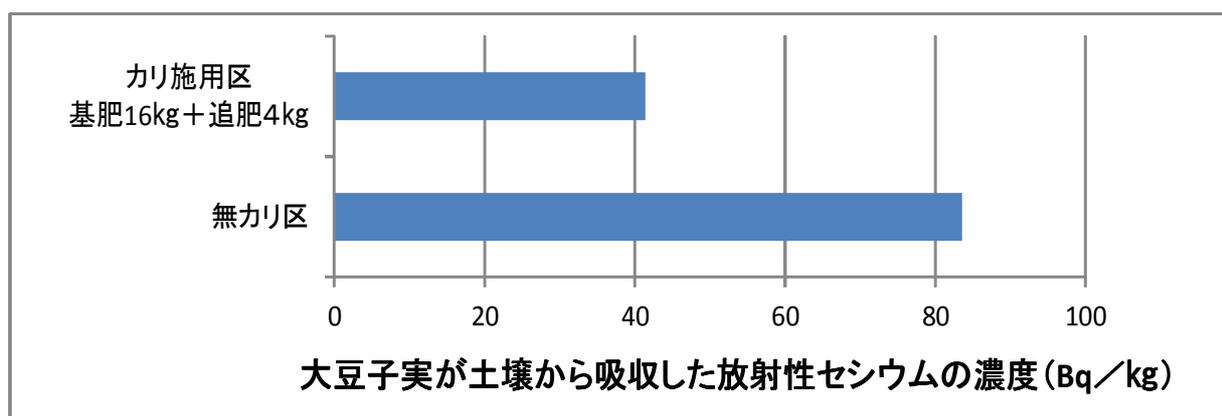


図-1 大豆子実が吸収した放射性セシウムの濃度（農業総合センター）

（2）大豆栽培における積極的なカリの施用

これらの結果を踏まえ、当面カリの施用を積極的に進めることとし、目安として基肥のカリ施肥量を慣行の2倍量（※）とし、さらに追肥で4 kg/10 a以上を施用する方法を推奨します。

【大豆のカリ施肥基準（福島県施肥基準）と24年産大豆のカリ施肥目安】

基肥の慣行カリ施肥基準	基肥カリ施肥目安（慣行2倍量）	追肥カリ施肥目安
6～8 kg/10 a	12～16 kg/10 a（※）	4 kg/10 a以上（※）

（※）土壌分析の結果、交換性カリ含量が10mg/100gを下回っている場合や平成23年度の検査結果などから基準値を超えるおそれがある場合には、さらに増施をすることが有効と考えられますのでご注意ください。

【留意事項】

- 基肥のカリ肥料は、高度化成肥料や硫酸カリ、珪酸カリが望ましい。
硫酸カリ：速効性、カリ分50%、大豆では濃度障害を引き起こす恐れが少ない。
塩化カリ：速効性、カリ分60%、過剰施用では濃度障害を生じる恐れがある。
珪酸カリ：遅効性、カリ分20%、基肥全量施用が望ましい。
- 追肥のカリ肥料は、速効性の塩化カリ、硫酸カリが望ましい。
- 追肥の時期は、開花期直前が良い（7月中～下旬）。

2 土壌酸度の調整（カルシウム施肥を兼ねる）

酸性土壌では放射性セシウムの吸収が高まるとされ、大豆の適正土壌酸度（pH）である6～6.5に矯正するため、苦土石灰等を施用してください。

なお、大豆はカルシウム吸収量が多い作物でありますので、苦土石灰等の施用は、pHの矯正のみならずカルシウムの施肥としての基本技術としても重要です。

苦土石灰施肥量（大豆、標準）	80～100kg/10a
----------------	--------------

3 たい肥の施用

たい肥など有機物の施用は地力窒素やカリ等の無機養分を供給するとともに、土壌の団粒構造の発達を促す効果があるため、特に大豆では着莢数（サヤ数）や百粒重（大豆100粒当たりの重量）の増大に効果があります。また、牛ふん堆肥などはカリ含量に富むことから放射性セシウム対策上も有効です。

たい肥の施用量（大豆、牛ふん、標準）	0.5～1 t/10a（※）
--------------------	----------------

（※ 土壌肥料技術指針によれば、たい肥からの有効成分量としておよそ窒素で1～2kg/10a、リン酸で5～9kg/10a、カリでは7～13kg/10aに相当します。）

【留意事項】

- たい肥は完熟であるものを利用します。
- 未熟たい肥は、播種直前に施用するとタネバエや雑草の発生を助長するので避けてください。
- たい肥を標準より多く施用する場合は、施肥基準量（基肥）からたい肥の有効成分量を減肥した量を窒素の基肥量とします。

問い合わせ先：農林水産業に関する相談窓口（電話：024-521-7319）

ホームページ：農林水産部農業振興課ホームページ（PDF形式ファイル）

URL：http://wwwcms.pref.fukushima.jp/pcp_portal/contents?CONTENTS_ID=10786

（他の農業技術情報等をご覧ください）

モバイル県庁：福島モバイル県庁→お知らせ・各種情報→農業技術情報

（右欄に掲載のQRコードよりご覧ください）

ふくしま新発売：以下のホームページより最新の農林水産物モニタリング情報、イベント情報等をご覧ください。

URL：<http://www.new-fukushima.jp/>



モバイル版 QRコード